

倪濤一系集

三

14

3157

30(3)



14
3157
30
(3)



俳詠一葉集附合之部二

古學庵俳号
幻窓 湖中
坎窩 久臧 校 編

貞享元甲子

程白本枯の身ハ竹之節ヲ似し可也
たそやとけしる望け山原花
まののま水子海原位とせう
可しられあをふふふ赤了
新解のふまうすまの白ひあふ
白のらて (平砂平米を) 菊
野水 若号 重五 杜樹 正平

三
くしの糸吊ふそのまゝに
箕子飲れ魚をいひいさ
糸折ゆりこり星くしく
くろくろいもとのまゆり
寝ひく居居り春霞の花
廊のハ後れうけはくさ
五 五 水 号 玉 篇

中にも杜幸の衣をふく
幼きれこも袴きし留り
まじりまじり尺の節の
中にもまじり尺の節の
くつくつあけれとをいひ
野水 杜國 篇 号

海より月袖を鞠籠を
柳をまじり真徳の宿
雨のゆり海魚の田畑
おくのまじり兒を只
床をまじり杖ハハコ
膝をかまけのこま
口をまじり痛をら
ゆりかかまじり首
小之右をまじり
白をまじり丸牡丹
繩あひのかまじり
くつくつあけれとをいひ
重五 五 水 号 玉 篇 五 水 号 玉 篇 五 水 号 玉 篇

初あひの幸らや嫁出の先く
先ひくくらけ喜そかたゆき
二 椀あま餅すゆの室原のあま
くさひを起よ秋留とも
藤深く楸を梅の華さか
三 隙可くん不破の再人
そすく美濃を赤く基を志の
解さ先くしれさすて七十
なかめすし法事とそあ花心
ひく川の傘のいとそくさす
道は子後ゆのそあふまらけ
まきりまつらう存松を海

水 小 号 翁 水 五 翁 水 五 翁 水 小

内子たしるる猫の髪のあつれそ
志きぬ環臨編を 中川
秋懐はあけりあきく静さハ
翁の宿つてふ糸を川ら甲
彼より祝をひくき山可けり
ひくくハ興侍の扇う内竹可
三々のむ鶴野尾長けと甲
しつらみしつらむ越の宿居ぬ

水 小 号 翁 水 五 翁 水 小

杖をひくくさくさく十か

はふみくく月くく首手霽水
水みみゆくまむあつら

杜園 重五

昌命の業を初狩人のまゝぬひく
水の伊門を井一河けのま
る筆を掃りしやを他におうすみ
る業のほ若きむ神をさしたんか
ら〜けり物もむ娘〜つや
たれ花も〜けり情〜しや
おみ兼の角力ら〜を〜を〜
黄まき〜喜〜後賀未の切
物月夜双ふあはれぬ〜
おみ買〜を〜作〜き〜
忍ぶ町の業〜を〜能〜け〜
扇婦の早〜米〜と〜

野水 扇 若年 正年 玉 扇 水 扇 水 扇 玉

扇ますは浪のありぬれり
佛 咄〜の海〜
懸ふも見二所と作られ
玉取す〜花の〜け〜
〜花〜け〜夢〜を〜
古屋の〜花〜あ〜
雲峰や糸綱の橋の長お水
花〜子〜柴〜け〜
三十〜を〜
〜の〜
〜の〜

扇 玉 水 扇 水 扇 玉 扇 水 扇 玉

あゝ人を行くを枯す秋はさん
けしひのひをくす片をくす片
三日月の車を見くく降の夜
秋の幽子聲之くす片
意ししをゆきしし片を放る
あしよふ念伴 蕪を隔り
新くすしししししししししし
おのれおのれしししししししし
おのれおのれしししししししし

五 水 玉 水 玉 水 玉 水 玉

難波津の河へ火くくかた

すけしし

重五

あゝ人の心を後 塵 中
花を棘の骨のちかす 吹之の
おのれおのれしししししししし
風吹ぬ秋の白 籠り 煙をや
萩 織 笠を 市に 振す
かた川や 柳 麻子 代 糸 織を
いしししししししししししし
あしよふ 念伴 蕪を 隔り
新くすしししししししししし
おのれおのれしししししししし

五 水 玉 水 玉 水 玉 水 玉

火を燃ゆ火焼くふ人を人といふ
門をのらふ門を門といふ
血刀をくくくくくくくくくくく
先方下る本郷の路七つみ
そまの御堂にいくまの
花より花梅の御堂に花より
信ものいふくくくくくくく
白蓋の御堂にぬまの御堂に
宜き有くくくくくくく
八十歳をこくくくくくくく
あつたつたつたつたつたつた
西より桂の花の御堂に

五号水五号水五号水五号水五号水

夢の女 御堂に木くくく
妹の家を焼く女を人といふ
御堂に御堂に御堂に御堂に
花より花梅の御堂に花より
つたつたつたつたつたつた
子の御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に
御堂に御堂に御堂の御堂に

五号水五号水五号水五号水五号水

新しき女房をもせむ村向 小

田家賦呈

我月や静のつくし無ひは
其のわたりはあふれあふり
櫻槍山家の傳代本堂陣
ひよすの牛の培はゆれつ
音もさか具足は月のみす
酌とる音もさかきにい
秋の涙旅の清き身い
ややくとれく不二尺ゆの寺
癖とる枝の木のさるる

若年 翁 重五 杜園 野水 翁 寺 小

藤のうゑもさかきもさかき
種々のうゑもさかき
庭のうゑもさかき
久保のうゑもさかき
麻のうゑもさかき
江のうゑもさかき
我月のうゑもさかき
旅のうゑもさかき
筑紫のうゑもさかき
骨のうゑもさかき
乞食のうゑもさかき
泥のうゑもさかき

五 水 笠 寺 翁 五 玉 水 翁 五 玉 水 翁 五 玉 水 翁

伊香子 遊むふののみくすり
 津く思ふの小角豆のむらりし
 萱 庭まきくは炭火つく向
 芥子 尼の小坊きしやちあむさ
 折る 葎の窓まきさきのみ
 新さき 飯基のそく月の家
 糸 種く 瓶風やうまき
 物 柿子 豆根子のみく片底
 豆 鼓つくく母の表子入
 元 頭の子は枝も竹ぬく
 依 尺木 幡の旗くぬもく
 い ち 海ふ 男 猫ひくも折魚

五 水 笠 号 篇 五 水 笠 号 五 水 笠 号

喜の志くすれを掃きよふ
 あり干をまのの聖わやう
 山 夢を白くまのあつし

五 水 笠

同

いのく尺くはまふ生をすめ
 朽 火年ゆゆ 枯 系ゆ 松
 木 城く下まぬを葉巻く
 捨 堂子 言を扇川す勢分
 浪 子 蛤かえん有ハ 海
 ひくくは橋をすすす改阜山

野 水 篇 杜 壩 童 五 篇 五 野 水

羽

同年臘月十九日

海客之野の春 浪の白く
 串に鯨をゆふ了 觸
 二百手系以山を寄取く
 裡の舞まぐ秋を暮す
 入月子翳けきよのまのれ
 知るまふ玉を家おさめゆく
 海客を志す母のまのれ
 一輪咲く草のまのれ
 棋の工丈二白とらし目とめ
 舟子歸る旅をくたす
 雲をほくはるまのまのれ

菊
 桐葉
 東蘇
 二山
 紫
 山
 菊
 紫
 菊

華表をけし 松の入口
 笠をかき衣の破れつる
 秋の鳥の人 舟子ゆく
 をとらし目とめ 浪の白く
 舟子歸る旅をくたす
 おくもく石の扉を閉し
 美人のかしら おもひ
 二 城夷の聲をきき 舟を
 生海客を志す母のまのれ
 木下をくたす 舟子のまのれ
 藪をくたす 舟子のまのれ
 ちりくと地礫化の舟子

山
 紫
 菊
 山
 紫
 菊
 山
 紫
 菊

すききり雲は盤石

一

翁

古人のやうに此夜の本にうし

翁

如行

輪廻をたぬく事こそ人のまゝに
行一つにまゝに足行みゆく

翁

桐葉

志のまゝに松を解くやうに

翁

志のまゝに松を解くやうに

桐葉

志のまゝに松を解くやうに
志のまゝに松を解くやうに

翁

閑水

東蘇

桐葉

木枯るに秋の風は
木枯るに秋の風は

東蘇

桐葉

翁

燈火風をまのこ紅粉
川激ゆる撃と角に能くけ
令利とる能くおのこ
かこまゝの湯せの花久
二羽打千海をさく
香よみそ女を春おろ
枕 屏風の終り候
中みけし蒲のいろをささ
之殺の舟深川の夜
危位やひく杜律をさ
花うけうさ竹をよの
いこ中野の吹をさか

端紫 端紫 端紫 端紫 端紫 端紫 端紫

水汲小伝袖ひや
月明く少枝を
花の夜露の流るる
村雨のそき花
山兔の瓜
望尺ゆる人ハ
男やも老の志
風くき大寺の
法門をゆく生
寺燈山岩
おま

端紫 端紫 端紫 端紫 端紫 端紫 端紫

同日

つ〜と板のせお袖〜ら
ひ〜とまを〜つむ鼓の一家
夕影山神の鶴を〜お〜と来
清〜とす〜ら〜る〜物〜月
わ〜ら〜き〜を〜鶴〜る〜竹の上
之の〜を〜を〜を〜を〜を
鼻〜子〜お〜の〜ま〜ま〜を〜
そ〜ら〜大〜三〜井の〜き〜
そ〜と〜海〜の〜焼〜と〜尺〜
お〜の〜ゆ〜と〜四〜五〜の〜
お〜の〜の〜を〜を〜を〜

桐葉

菊

山

東

山

菊

山

山

山

山

山

佛〜と〜き〜む〜
鳥羽玉の〜き〜
冬〜と〜破〜る〜
秋ハ〜只〜者〜
白子の〜
浪〜と〜
院〜と〜
堂〜と〜
云〜と〜
鶴鈴の〜
風〜と〜
華〜と〜

庭

端

菊

山

山

山

山

山

山

山

山

山

草の青くはぬくまの
手ふくくききあゆみの舟り
からんのくくくくわ
くすくくききあゆみの舟り
祝のくくくくわ
くくくくくくくくわ
省古風をくくく舟のくく
花あつくくくくくく
茎の尻をくくくく
出代の橋をくくくく
くくくくくくくく
地雷火くくくくく

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

海の小樹をくくく
傍正れたくくくく
くくくくくくくく
お菓家のくくくく
旅のくくくく
物あつくくくく
花のくくくく
端紫翁のくくくく
風冷神のくくく
振あつくくくく
まあつくくくく
燈のくくくく

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

昔懐作くあきし志くしく
この記を今いそぎて千歳を先
鐘を花あれいやはいひの聲
わたりて手付はかきとるる
おきりしとらわらうとら
戸隠の山いふ家よの部
河津梨もてあきり父の三年
多氣とくわかれ自惚の一念屋
舟に夜しいのらあきあ
雨そあけぬき火いづく船
雪花のあけぬきもあきり
既すよの基すあきり人をあきり

二腐 嘉堂 風 霜 角 丸 為 堂 風 霜 雪

吟石の雪く白眼ともしやら
映臨新千とらり月よらよ
海福瑞みんたのりし心秋
枝の雪は霞あきり小舟あきり
くしとらあきり美婦あきり
花あきり玉りの風は後りいり
水系をき丸山の 喜
三尺の鯉子小船料理の言
とわあきりあきりあきり
幾回の幾い片やあきり
逝水やとらあきりあきり
白きのとらあきりあきり

角 丸 富 堂 風 霜 雪 角 丸 富 堂 風 霜 雪

支 碎 礫 の 更 平 變 一 一
臨 の す け み う の け ら 黄 女 々
そ 一 息 女 の 骨 を 二 洞 一 一
我 造 り ぬ 捕 の 死 を 指 を 心
き ぬ 一 の 衣 骨 女 一 一
明 の ぬ れ 一 つ 一 の 人 の 一 一
古 梵 の せ う 記 花 四 を せ
ひ 一 一 一 女 骨 臨 の 骨 女 一 一
引 板 を 業 一 一 一 一 一 一
武 古 の 骨 の す さ 一 一 一 一
七 里 法 華 の 七 里 秋 風
五 之 の 雷 南 女 骨 一 一 一

九 高 角 雪 扇 風 臺 富 九 角 雪 扇

権 の 小 骨 一 一 一 一 一 一
臨 陽 神 の 骨 一 一 一 一 一 一
狂 女 一 一 一 一 一 一 一 一
情 一 一 一 一 一 一 一 一
將 一 一 一 一 一 一 一 一
空 骨 の 一 一 一 一 一 一 一
枯 一 一 一 一 一 一 一 一
智 骨 一 一 一 一 一 一 一 一
三 里 一 一 一 一 一 一 一 一
扇 一 一 一 一 一 一 一 一
三 一 一 一 一 一 一 一 一
臨 骨 一 一 一 一 一 一 一 一

扇 風 臺 富 九 角 雪 扇 風 臺 富 九 角 雪 扇

砥水きりむる五郎入る
梓もこは戸も穰くかくこ
きらむしそ風うほく敷
伊藤すしれ湯柳の敷はき
入院尺あひの長う砂と法
一陽と繁正月とやう未
ぬ機ようりひきや
深なみのあししおれをぬむ
志の子れみしれ瘰癧もく
うや幸とらう紀川竹をく
名もあしはきりそあし
后の月あし入尉あし

雪角丸堂風筒雪角丸堂

こけききひききききき
みのまは狂討つるれし
忠なり死する場なり
那雪け石西四
小女郎小まんら大根曳丁
血もそく起時もけけ
尺よよのあひ川ハ西むき
湯あしあをささあしの新清
汗涼ううう憤り
そくうけ旅字案う空紫
ふりこくさく小枝の中
枝花もそいころ月のま

風筒雪角丸堂風筒雪角丸

梅さくら〜まのやちをぬすまれし
秋葉をりぬする生ニつゝるいふ

翁

秋風

香さくら〜幸息さくら枇杷の度葉外
笑う〜こ〜山をぬすまれし
りの虫秋洞の音をきく〜

秋風

翁

湖春

檀の木北のやちかたのぬきあうぬ
家す〜去をほ〜ふ〜こ〜

翁

秋風

梅随く〜ぬ〜梅今何々
葉の虫けをぬすまれし〜つ〜
葉の中〜の葉の虫の葉以て

湖春

翁

か〜さ〜のやちをぬすまれし
山ハさくら〜を〜紋〜す〜

翁

秋風

梅さくら〜まのやちをぬすまれし
山ハさくら〜を〜紋〜す〜

翁

秋風

貞享三丙寅

柳陰残

其角

日のまをりてさすのり 柳のゆゆみ
えのりゆゆとさすのり 柳のゆゆみ
さあけけきささのゆゆにうけし
つくぬゆの影さくぬゆのゆゆに
さすのゆゆさすのゆゆ

みきうにさすのゆゆの柳の影

文録

貞享三年の柳の影
とて當時の古くさすのゆゆ
さすのゆゆさすのゆゆ

本筋のまをりてさすのゆゆの柳の影
けきさすのゆゆさすのゆゆの柳の影
柳の本のまをりてさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影

松風

さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影
さすのゆゆさすのゆゆの柳の影

是亦素衣之何を付ててもあく何と
強ゆるも多し里しの素衣のひら
より旅衣を替ひおしむるもくた
らふにきよく南を伴へ侍る事
毎日子法なる事

奉白

おまの粒信く之為所中をゆり社われハ
そと通る里の信りたること
はましくも衆の無き事なす心
事なきの無き事なす心
度く衆人のよきもゆりたること
改まらば
かゝるかよき事ありむらねのあり
み
軍務を替ひよき事あり
弓の射歩鳥帽をえりける
附ねる事ありま白軍の事あり又
一白文よりいへりて耳を和歩歩と

朱弦

おまの粒信く之為所中をゆり社われハ
そと通る里の信りたること

蚊足

はましくも衆の無き事なす心
事なきの無き事なす心
度く衆人のよきもゆりたること
改まらば

五里

かゝるかよき事ありむらねのあり
み
軍務を替ひよき事あり

弓

弓の射歩鳥帽をえりける
附ねる事ありま白軍の事あり又
一白文よりいへりて耳を和歩歩と

ましゆーの付やうやくーしよーの
の姿を眼を付て尺くし

くきを付たふも富の尺あさめ

あふを標中ーし付く句く源

ーをまーしを却し世を控

を心も能く観也

あくされし何の本様のお度子

富の只酒もーしを多れに廿日お

すーをさゆを能く本様の也の

さく志わく赤糸のれひさほーし

よる情能ーしを又言をまーし

のり作む感懐り

執筆

文鏡

後任女 きぬーし

後任女はほろひの妻とて人あしめ

まれーしをほろひの物と和ささ

あひをささぬーしをかきぬ

子方の物せひつーしをけしけし

あしやうあふのとをさし敬味

山海方乳をのむ精のあし

磯ハ里水き濱海おしをささ

む姨於更科よりけしと山敷

姑を山敷ーしをひさしを

精くさし女と字をぬーし

かすのあし意味さしをさく

貞角

コ齋

以のらそと甲斐又の代とも尺よ
松風

霧のあつてきよ山川のさけ
一き御を形置
ゆ

はのち系別髪をも埋みま
松風

袋の危く物ささまきを
岩を敷
の古法本
奈

とつこ一れ記をも
茅草

あまふ
あまふ

嘆のりり車か
李い

あひ陰名の御を
福を
花入

橋ハ小
他化

まの
うす
や

跡
朱弦

是又まのけ

叶を田圃とさすはくもはれはるる
まはさるる姿ゆれぬるきりきり
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる

岸白

志のうさへてはれはるる
白付のうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる

子里

あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる

扇

あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる
あつ秋あつと欠てまよはし
をのうさへてはれはるる

松風

疾起こゆのうらふきんけしき
芳重

時をたもて命をいふじみ徳をけし
一むとてうし時をきつとひたすつら心
おとしゆのちをきんて起てしむけき

舟子 夢のゆめ海ゆめをけし
其角

おき水急は海なごにまつるゆめ海をけし
うき夢のゆめをけし風来家特しとひ
えけぬおきし夢のゆめをけしうき夢のゆ
まじとれにひひうぬ物をとあひまひひ
うき夢のゆめをけし又此世の武士

浪客 舟子 人の娘をとつれこ
李山

舟の趣向句候けおめし具足き船

中に風来人の娘をとつれし夢のゆめを
さきとて他をき新し其味をけし
松浦のゆめ女をうき成に心をけし舟の
夫なご空取つて心をとくわのつりて
空人のうきゆめをけし時情をけし
孫助のまきとておめいおあし
此のむすうをけしけれし心をけし
うき夢のゆめをけしうき夢のゆめを
けしおをてしうきとてけけきとて
不仕力

松風

待つゆめの時ハ墮つる夢のゆめ
翁

孫助のまきとておめいおあし

之や一と云海野呂千もわのい物休
一も休を心守のけく得の地を居るむ
くの中と認め就改るのくくはる休
るく地さくくく又字をくく一の味を甘
くくは静るるは改はひめく

友よふ 蟻 け物ききの 奇

世化

友よ蟻と改改くくく付る付むの休
物儘さくくく奇くくく改くくく
よくくけくくくく改くくくくく便
あおをを改くくくく

宙さくくくやくくくく 歌景

コ表用

和の付くくく改くくくくく歌景
改くくく改くくく改くくく改くくく
よみ付る改くくく改くくく改くくく
の改くくく改くくく改くくく改くくく
くくくくく改くくく改くくく改くくく

門 八 意 千 改 際 の 寺

岸白

鄙の休改くくく改くくく改くくく改くくく
細く改くくく改くくく改くくく改くくく
と附く改くくく改くくく改くくく改くくく
改くく改くく改くく改くく改くく改くく
改くく改く改く改く改く改く改く改く改く
改く改く改く改く改く改く改く改く改く改く

改く改く改く改く改く改く改く改く改く改く

芳重

世もろくし海も秋の萩の香もよきし
ほきもあふ 聖 神のくまをきく
想風

此の竹根一石又まきとて物遣ふ人の
萩の稲妻のしつゝすむかふ聖 神
ゆきもいづれかすくはれぬのたふこ是
おもくくすくはれぬ

人阿まこと事とて物とてうらむり
揚水

はら又秀逸し聖の香もよきし
大晦りの夜もよきし
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
かみきとて物とて貴れし香りの心
も多しおれぬ萩はすく

酒もろくし海も秋の萩の香もよきし
洞 未弦

金山の系糸の大空し香りをよきしけ
くはれぬしつゝすむかふ聖 神

右も美し物のほしきもの他他のもよきし
くはれぬしつゝすむかふ聖 神

世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

け玉け武地をもよきし
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

玉川やわのくはれぬしつゝすむかふ聖 神
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

はれぬしつゝすむかふ聖 神
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

おのふれぬしつゝすむかふ聖 神
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

おのふれぬしつゝすむかふ聖 神
世もろくし海も秋の萩の香もよきし
想風

竹うらるるさハ夜かこよは
南むく葛屋の畑の香あきし
親と桂と折屋のつれ
餅化しあらの度あまを折合を
糰子買し秋のころ
唐のうもとのいぬ人もあつた
あつき男のつゆあすは月
蓮の雨後七里をぬきしむ
浮船河内のみは川つら
あや米つらきあつた
梅ハさうりは院くを閉
二月の蓮葉人もすさあつた

楊水
不卜
久麟
松風
翁
朱法
不卜
李下
楊水
甘角
白毫
コト

姉すのちねをふくの
胸のぬれ裁の端を蹴る
あまのあつたあつた
菱の葉をさすのみあつた
木魚のあつたあつた
田をやし休むのあつた
萩さあつたあつた
あつたあつたあつた
と度端芽あつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

芳音
翁
松風
久麟
李下
コト
不卜
子喜
朱法
仙化
李下
久麟

煙よりみ習ふありのくつくー
 岸白
 中流ふ笏折り子驚うー
 岸白
 梅まゝの昔ふあひひまうー
 口吉母
 村角より石のくもー火吹けぬ
 咲水
 地とく 花の沖とま川うー
 仙化
 伊あゝこのる内子 釣りのあうー
 不卜
 楫とくまきく楫つくー秋
 李下
 俣長のやとされつ世やみゆー
 柳水
 尾すくゆー 花ふの火
 文鱗
 紅子牡丹十里れまをふー
 子吉
 ちとむ昔子あふゆと
 咲水
 岩根流すもふ地をを花ひすく
 女角

吹くや三井のさの法法とも
 口吉母
 道ぬきーあふ奴子返来ー
 仙化
 管弦をさるすも月ハ流ー
 芳重
 足成の危山よりーの流ー
 柳水
 子あゝ唱う観るの流 名
 女角
 舟ゆーつ海みまのーお川傳心
 松風
 をふーくーすーの松の志ー流
 咲水
 宿むー石の七つ子あふ 花あふ
 不卜
 まふくーくーのまふくー久ー
 岸白

古直一尺まきいーと疑子
 古本
 久のくやーくま燈ーく助を在

旅あゝ友をささぐ山こす春
か枝ハるす梅の葎掃墨く
よしこひきる一瓢の酒
月ふれく燈火赤く海の上
味ハ塵子吹阿きのおと
牛嶋子給持とく羽折る深
宿位阿くく真女百々を
提灯千大燭燭の言々う
出あよりいす字の材木
吾くくハ舞子そりる春の習戸
けくく阿戸く後言夢え
仇人のあより阿より氏を於

其角 鼠雪 末 末 末 末 末 末 末

けりけり付たる果そのの
峰一送了八守山もとの火の
軍の加減うとき長おひ
七はに心くくくぬ月も
浮生くうけく梅東の帳合
高修い阿方清くはうく
小姓は阿く葎紀の中
丁常もくくくくく不杖袋
あふのくくくく次戸の地蘇
表まきくくくくかくくの対き
たらくくくくくくの夕け
宴かきくく余くくくお顔え

末 末 末 末 末 末 末 末 末

三十八

三十八

毛體を——きく画のと——り
 こらゆる底のふく十景 家
 りそ何時そ 醉さきの月
 きうくはつこしほろのふけふ
 堂にくすしき筒の解法也
 つりこもふ部の復たの片燃り
 四の節意うそくく家の子
 鼻つすむ昼うくえの生 看
 けとらうきけぬるふきり
 縄きれく架本を吹く花もらふ
 ねふと葉のこけりく長まき

角 扇 末 角 堂 末 扇 堂 角 扇

三月廿日

花吹雪七口朝見く物もく可れ
 懐く姓はわくく 細橋
 足踏木をまきくお代——
 末一糸をまきく 屏の戸
 名有る 隣ハの箱くこ字 枕
 杖尺くく——き 柳の葉を刺
 善名子くハ虫はかきく
 肉かたハ向きハうまうく
 既子立付くの使ハの巻く
 一巻の巻り 踏こらけく
 和のり息ハハハハハハハハハ

扇 白 風 甚角 口扇 尊良 清風 等白

生々 燈子 女 子 けり あり けり
影 けり けり 女 敵 と 言 けり あり けり
し けり 餅 を ね けり 山 寺
を けり 持 燈 けり けり けり けり けり
虹 の けり けり けり けり けり けり
沈 み けり けり けり けり けり けり
三 けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
男 けり けり けり けり けり けり
膝 けり けり けり けり けり けり
ふ けり けり けり けり けり けり
耳 けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
系 けり けり けり けり けり けり
楯 けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
物 けり けり けり けり けり けり
眉 けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
意 けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり
何 けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり

風 良 富 白 角 富 富 富 富 富 富

風 角 富 富 富 富 富 富 富 富 富 富

車も下ろさずの体しん白

和漢

破風はしるも影や弱く夕すま

篇

慈系 蠅 避 烟

書

合 飲 醒 馬 上

書

かき多し 少洞のま 落すも

書

月代 見 全 氣

書

露 繁 添 玉 迹

書

張 旭 物 古 多 くの 破 の 中

書

帷 子 在 古 多 くの 破 の 中

書

摺 帯 驅 偷 鼠

書

古もあらず 新もお魂 全 篇

思ふも如首 忘れ 極め 撥

書

氣も心の 縁 何と 言 足

書

舟 鉤 風 早 浦

書

鐘 絶 日 高 川

書

魚 食 け ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

書

託 教 三 社 本

書

韻 使 五 車 填

書

花 月 丈 山 閑

書

海 月 杖 つく 文 の 心

書

剪 銀 鮫 子

書

其角のつらき... 其角

漆きぬきや... 其角
葛の蔭ふく... 其角
能くく... 其角

貞享四丁卯

松... 其角
きん... 其角
時... 其角
月... 其角

山... 其角
哉若神... 其角
松... 其角
か... 其角
あ... 其角
行... 其角
髪... 其角
志... 其角

はたさう〜心かきそん〜く時あ 濁子
岸燈のあかり〜く〜る 月 扇
貝しろい〜し〜ゆ〜強き行〜 扇雪
醉〜ハ人〜肩〜し〜う〜く 其角
〜の〜お〜れ〜て〜お〜し〜ら〜お〜祖〜父〜の〜あ 扇
根松苗 秋蟬〜の〜啼〜き〜 子
池の橋〜〜〜〜〜めぬ垣越〜 角
みどり〜入帆〜足ゆ〜る〜庭〜根〜枝 壺
奇の中〜を〜画〜の〜う〜れ〜〜る〜あ〜の〜燈〜 子
妹〜の〜か〜ら〜北〜倉〜梅〜や〜き〜き 扇
記念〜〜〜袋〜の〜ま〜れ〜れ〜ら〜〜〜 壺
あ〜を〜と〜占〜き〜〜〜の〜筆〜の〜新〜風 子

はのふねまよは〜と物〜〜〜 扇
二瓶〜〜〜の〜花〜心〜ま〜〜〜心 壺
一巻の巻末を〜〜〜む〜た〜ち〜り 子
苗代〜ゆ〜の〜あ〜ら〜ら〜あ〜り 壺
酒の葉のい〜ゆ〜を〜と〜ら〜〜お〜む〜し 扇
秋風下〜る〜ま〜り〜の〜月 子

同

舟屋中人〜〜〜ぬ市の物 濁子
晴〜〜〜ふ〜入〜ゆ〜い〜の〜雪 其角
寺の負信ゆ〜ゆ〜ゆ〜 扇
火をた〜く舟の星〜〜〜ま〜空 仙化

松竹の月
かきしにみんすき一む
たか持る幸の如けしあむ
春の翠の層ははるむ
かきしと友ははるむ
うけしと心ははるむ
松竹の月
かきしにみんすき一む
たか持る幸の如けしあむ
春の翠の層ははるむ
かきしと友ははるむ
うけしと心ははるむ

松風
二齋
化子
角
化
角
角
角
子

花のうをえ八の長と一む
松竹の月
かきしにみんすき一む
たか持る幸の如けしあむ
春の翠の層ははるむ
かきしと友ははるむ
うけしと心ははるむ

松風
二齋
化子
角
化
角
角
角
子

月入る電流の音すこく
〜の音を荷ふ枝に米
塚のふ母を〜秋の夜
邦をも軍を〜ゆきそ
花のたぐき〜つる種つむ
す〜甜きゆす目白き

十月十一日 飯子會

旅人〜系名〜初対面
ま〜山〜
鶴鶴の心〜
糧を分〜山〜

子 角 富 化 白 其 松
子 角 富 化 白 其 松

かけ〜〜
新〜
中〜
鮎〜
津〜
於〜
酒〜
和〜
鮎〜
等〜
是〜
月〜

文 仙 魚 款 全 角 執 篇 之 角 風 鱈
文 仙 魚 款 全 角 執 篇 之 角 風 鱈

臨家や家居虫の友千交りん
茂千むく海苔すくふく
管海ふくくくむれ本芽のみ
あきくれくく喜の山

水 菊 火 之

香名香とん作と松人の句をみく

如行

旅人と香尺もやきおまの香
さつつきききき風ひききき
まの孫の本城を新をえん
あきくくくく庭の砂系
小法師千駒ひふむふ頭も
柱の古枝も海千折も

桐葉 菊 竹 紫

香名香とん作と松人の句をみく
あきくくくく庭の砂系
小法師千駒ひふむふ頭も
柱の古枝も海千折も
まの孫の本城を新をえん
あきくくくく庭の砂系
さつつきききき風ひききき
旅人と香尺もやきおまの香
香名香とん作と松人の句をみく

竹 紫 菊 桐葉 竹 紫 菊 竹 紫

芭蕉翁不悦して止ぬ

芭蕉寺の白く業言亭に飛鳥井雅章卿の

侍従子のかてけりしを和す

系やうくハキと小中やあまのや

子々まはしくく月海の月

小松ふたふとほろくは初らて

酒家さしあはしハうろの風

浮於し既也の慶をもあそくひ

僕ハおろはれこ牛いとくし

あふ川之反哺ハ物言つて

つらハ命カ飯くすつて

そく舟夜とゆけのそく山く

翁

業言

知足

如風

安信

自嘆

重辰

嘆

嘆

障いくまみしる東の

手安わのほのほも一ひ

ふとこをそくく歎の無物

髪はりの無の油はるつて

あふ瘡か秋ハ霜若し

物い風のふとほくそくあ

桐枝お撲のらうろくそく

少油くそく風のそくそく

こくく猫のそくそくそく

夏の手をぬく二十とや

父の軍と起すのそく

松のけりかそくそくそく

翁

足

寧

翁

風

作

足

辰

作

足

翁

嘆

月をくちくちと物さういれ女
家よおひつとさあけりあまみく
千飯のふあはははえとよまや
えし来るる布の苦みある屋の法
涙しつとく融かぬは
門法の前尺了人のあうり
笑う雨もさう唯の輪あ
能くは雨さうくはの礎ま
夜のめさうと膝つとあま月
くあしと律儀さうの待れつ
唯くもくくくくくくくく
尼寺のまもるくくくくく

舟泉 執筆
洞 碧 水 子 翁 変 今 泉 洞 碧

物瓶さけりいあはとさ
夕のほの折さうつとく人さよ
布杭二本さうさうさうさ
皆さう様 妹をさうさう人さ
食さくともさうさうさう
旅さのゆをさうさ物さ様や
くさ製刺さうか茂川のあ
増のさうさうさうのさうさ
ほさ、平射の杖さうさ
有さのふれ智をさうさ
物ささうさうさうさう
は橋をさうさうさうさ

変 人 子 泉 碧 水 洞 人 子 泉 洞

五十二

五十二

山ひやわし〜
志こけけ〜
智うらひ〜
何より〜
義の中〜

雲水人洞雲

甲崎の園を尺〜
船 酒〜
築山のあ〜
遊子子猫〜
〜その夜を〜

菊言 知是 自嘆 安住 菊

一里の〜
舟き〜
市子〜
牛め〜
霜向〜
舟を〜
舟〜
岸〜
危造〜
啄木〜
吹雪〜

如風 重辰 舟 風 吹 是 舟 辰 風 吹 是 舟 辰 風 吹 是 舟 辰

十四

廿一 松かさきき風山
系鳩 陽の山のちけふひ
新く花く自ふふ言のいし家
常一り中くけし原さひの
肌をくふくぬれをくくみ掛
こけく整めくろき強カ
的わく種ぬまむねくく
破れし玉女境もる危
古柳をひくくさる麦折る
抱夢をや世をくくん
松のく食前ひゆく松の風
雪もくく花あく花く内

系 系 系 系 系 系 系 系 系 系

就中 崎の礎了りゆゆある
浪泉のあえ了人七すさめ
成塚の女いふれあやをく
怪 怪 怪 怪 怪 怪 怪 怪
新有くくく行く怪きめを
ゆくくく坂の系掛
有 湯の一里の河原くく
ゆくく志川む村の砂跡
幼雲いく度くけ了起す
物衣をすくくさる字を
能くくくくくくくくく
湖くく岩おかてれくく

系 系 系 系 系 系 系 系 系 系

おゆらむ松千も似る思ひこゝろ
わくわくの聲は村風月あり月
秋山の外籠をそ告るをうしに
そ一節をかりかゝる萱
優優寒の湯腐つてゐる文次
首人 起す夜はゆり
意氣千ぬれ葉いさう雨の音
石の下の葉をきく女も嘆き
春の夜を待つにみちあり

紫 角 紫 角 紫 角 紫 角

五十一

路くくや葉葉の涙か翁 叶
條士の葉とまぢりぬ 梅
山車の志はくくくくくくくくくく
路を狭くくくくくくくくくく
矢中れあうほそ長き葉の風
わくわくはすくたくくくくく
家のまじりぬをかの家遠く
音くふつけくくくくくくくく
木孫様をそぬゆきぬくくく
くくくく佛のそそりちうつく
きくくくくくくくくくくくく
放った葉のそそりくくく

如風 翁 葉信 重根 自嘆 知足 葉言 位 風 足 吹 翁

五十二

まがほの籠 珠ののこり
蝶けし 露の軒より 月
秋や昔三子もけし ちたうや
吹りし ちけり 夕ぐれ 花のちか
ちたう ちたう 義豆を けすも ちたう
瘦し ちたう ちたう ちたう
米より ちたう ちたう ちたう
山の ちたう ちたう ちたう
わの ちたう ちたう ちたう
うき ちたう ちたう ちたう
ちたう ちたう ちたう ちたう
ちたう ちたう ちたう ちたう

言 足 吹 風 竹 菊 辰 竹 辰 菊

いろ ちたう ちたう ちたう
身 ちたう ちたう ちたう
枝 ちたう ちたう ちたう
き ちたう ちたう ちたう
貝 ちたう ちたう ちたう
新 ちたう ちたう ちたう
身 ちたう ちたう ちたう
母 ちたう ちたう ちたう
年 ちたう ちたう ちたう
お ちたう ちたう ちたう
ち ちたう ちたう ちたう
原 ちたう ちたう ちたう

言 竹 辰 菊 辰 竹 辰 菊

笑招き人日ゆりしきもの
舟子禁火を入る本ゆ紫
五六丁布細干き家尺し
柄杓終つて葎の中ゆ
ゆりすしゆゆゆゆゆゆ
款くも揚るまの夜
帷子干し羽折る秋ゆ
食子縮くまをゆゆゆ
神主もきハ大うるまゆ
垢んすくまゆゆゆ
と名くもまゆゆゆ

人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子

舟中りりりりりりりり
忍い入戸をゆゆゆゆ
うきまき終つる月ゆ傘
長き夜をゆゆゆゆゆゆ
人子抱えくゆゆゆゆ
舟の帆干しゆゆゆゆ
舟まき梅もゆゆゆゆ
是より人ゆゆゆゆゆ
に物まゆゆゆゆゆ

人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子
人 水 舟 子

春もさあつての程 通つた 女
己海つくといふ程 桑葉の音しと
手 鬼足しと みの出た 父
布袋 破竹 次舟の 秋の風
松 島の 月
ひまわりと 桑の葉を 忘る
葉 戸 けききと 遊る 踊る 如
ほくした 志やうの 端の 葉を 似し
河 へ 姿やう 話さう こと
亭の中 紅葉 登り了 嬉し
然と 舟 登る まるの 結 けり
旅衣 尾張の ぬれ 十葉 あり

水竹 翁 人 翁 水 竹 翁 人 翁 水 竹

富士 画う 文と 妙
松子 登り 入る 花 相
新 柳 あり

水 竹 人

土月 二井 亭 無行

松の 柳し たる 沙を 又 月 夜
春 走り せは かつ ち 雲
只 ねしと 空を 吹く 杉 焚く
我 海を 尺 舟 舟 音 あり
琴 舟の むら 上の 上を 休む
浮る 舟の ぬれ 水 あり
起る 舟の ぬれ 水 あり

一井 人 昌 碧 楚 竹 東 睦

翁

みよれー 登天の汗ぬくいけつ
おしきり又ふけりききりききり
乳をのむるおきりし
麻布を織りしに織りし
菅をとりしに織りし
又きの矢すゆゆの雷のき
るもゆりしぬ山際の方
小男麻の袴を袖に付し
花のゆりしにぬる月
木うしに付けし木の二つ
とけしつくとけしつくとけし

菊 人 竹 号 碧 人 井 菊

錢別

時雨に強かりてん字の能
火焼の葉をてつて人
松風をそりてぬる尺ののり
おきりしききりし山月
後山に三つかき秋のき
葛の縄面をゆりし文
織りしききりしぬるききり
餅にききりしききりしき
ゆりしききりしききりし
清ぬりしききりしき

菊 白 石
溪石 其角 卜千 嵐會 白 菊 石

岸白

同

志ろうのひらきをわきまの松
一羽わうのひらき一むね
枯きつひのひらき松のみとく
田中のをはれ通るそゆく
自わそくわのちかへ敷
秋風上り門の半
春の系瑞を通り橋のき
雨のハスをきしきあのみき
松林女あしきけえく
雲情うけをかきく

松江

菊

曾良

依

泥芹

水萍

風泉

夕菊

苔翠

洗筆

くしの秋麻島り新のり
きくぬちむきしゆの力とん
危をけく

風瀑

菊

一品

琴花

虚洞

菊

女角

深川ハすみ色咲波も時をくれ
まねえくけりけのひらき
初雷のけしめ北市の白和えく
おとく月かおねうみか
牛車系おろまあはそ安む
おのふ心も母ふふ富う冷き
香きしけりみりおのる

麦飯をうやむやに食ふを存けり
夕べとさうりに山菜 笑ひ
昼の忠告をうやむやの宿にうて

野人
杜重
野人

翁

いさゝらハもえり 終りまき
現のうらむれ あり 起
同 海の傍にありぬ 舟をこり
三十餘年 あり 此 兵 あり
阿比の山ありハ 舟の海にあり
かや 釣せは あり けり

左見
怒風
野人
支那
故江

翁

美のむさしきも 舟の 枕ありぬ
あしきも ありぬ 舟の 枕ありぬ

起倒

翁

からふるは 杖を 扱き 置て あり
角の あり あり あり あり あり

去芳

翁

何の本れ 舟を あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
また あり あり あり あり あり

又云
益完

大
十
五

大
十
五

二葉のすゝしけしききらら
弓的の子我をきぬ引つて
糸きぬハ長き杖のゆき火
約折る氣のかよふき
門はとぬる田の中は古
山はまゝ信ふすれぬ袖の汗
たふしきとたのむさ
女のみ古ふゆぬの破す
櫛を射つては海首一つ
ゆわくそに海をくまはれ物心
陣の仮面を信の籠りて
白をすのゆはれぬを折

平庵 勝延 清里 光 翁 危 翁 色 野人 尖 里

けしめえたる玉はゆ 綿
もるぬを結、襟織とて
きりきりつくと指のくま
神祇の信れぬぬはまの物
返りきつとつとまぬの件
急務とぬぬやめぬぬ
も終る追手起し 咲
たんとぬかぬの信のま
信のゆきものさすま
ゆきゆき薬の一をぬぬ
約の王子は海ハさ
あつたきききききき

危 翁 色 野人 尖 里 光 翁 危 翁 色 野人 尖 里

天十六

あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて

考 有 翁 字 翁 翁 翁

如行

あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて
あまのつらみはたてしきりて
いさつらみはたてしきりて

川端 岡水 翁 桐葉 東森 江山 柱楫 執筆 行 湯

勘子の橋のかけつらう一尺
愚態も手の中おぼやかし
かくきは又の袖の袖もよ
際りの東ハ方行まてと
一里ましふふ青林の葉
あやもささきし月く山陰子
たさみしき風のとさきのみ
暖れやハとやかくかさる
清義すみしと橋のとら
たさみしき風のとさきのみ
非人と教そしとらあう
後らぬしひらつ明水の一寸紋

水 翁 葉 行 端 楫 山 麓 葉 翁 水

一寸と書く一寸の
字梅村庵の縁の葉の白心
やうかきしとらあう
又してとわされとあを月あう
何西やう清き秋のふた
古是れ石のそととらあう
まあのかをいしとらあう
お十二のさしおのし忘り
不浄をすける金綱の体
智やあまの葉の葉の葉
おささきしとらあう
六河の花と古濃戸の秘氣さん

行 山 麓 葉 翁 水 端 楫 山 麓 葉 翁 水

よのれ風の宮面は
葉子くさくさ木はさしてのこぼるる
長座の外面を名無しの

同六月十九日

葉地の井の層のむき
まねもくらくとゆるがすの子
さくみやうみ火もすき待
解のつらうの大き
前さきそつり人の通
麻巾小窓の屋はさし
去路よく烟はさき

若文

越人 越人 越人
飲玉 飲玉 飲玉
若林 若林 若林

櫻の山岨の風より吹く
古きお瓦もやうに新し
萩（らき）の燈人の雲
湯（らき）の志ありて
丁の糸くさ舟のせはさ
次ぐのえんは舟の
子ゆいあめ、おき
葉生の垣根は
園ゆけの組父の
足跡を宋の
つぎりの舟を
秋の風橋祝つ

無言 己百 梅樹 臨歩 捨原 用足 東巡 人 文 号

そこのかきうけくきかかす
花さうくき白きさきさき
傍のめくさきさきさき
字程子宿あしし長軍
跳りけし一鞠さきさきさき
みくさきさきさきさき
弁あゆみさきさきさき
浪をさきさきさきさき
荷もさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
もえさきさきさきさき
さきさきさきさきさき

然玉柁蟻百翁呂系歩巡文

さきさきさきさきさき
おきさきさきさきさき
名もさきさきさきさき
時もさきさきさきさき
まもさきさきさきさき
けりもさきさきさきさき
孝子密柑を折おきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき
さきさきさきさきさき

然人翁玉百呂京巡笠文然

七十一

七十一

はー 甲寅うーくわーら 及 松
去まうーと 松おは干のちせ貝
風ひおまおあうのうーくーし
うーくーくーくーくーくーくーくー
ゆ階子ゆーくーくーのちせけお
本松うー花ちらうちの 菊 被
懐御もーくーくーくーくーのちせ

お 松 人 菊 号 附

七月十三日 写海御堂

初秋や海もま田のーみとま
のーゆーくーのくーくーくーくー 月
行府き方けのくーくーくーくー 配く

菊 重辰 知足

獲くーくー 藪お竹まーくーくーくー
蛤のかわーくーくーくーくーくー 砂子
望くーくーくーくーくーくーくーくー
白面のちーくーくーくーくーの神
田面うーくーくーくーくーのちせ
お乳まーくーくーくーくーのちせ
わーくーくーくーくーくーくーくー
長尾強くーくーくーくーくーくー
菊 菊のーくーくーくーくーくー 菊
折るくーくーくーの鬼お乳まーくー
龍 鶴 鬼 くるーくーくーくーの 惜
深瀬川 向くーくーくーくーの 神

如風 安作 月吹 風 足 風 吹 菊 辰 菊 風

藪の中より見ゆべき柳
秋の雨かり新しき山
月あふぬ山あり山
ひらりと人の心せはひらきよ
移らぬと人の心せはひらきよ
本葉らる枝のまもれそ月
はらとらる枝のまもれそ月
道はる枝のまもれそ月
霧より霧より霧より霧より
あけられぬと人の心せはひらきよ
死す下もあふぬ山あり山
るれもあふぬ山あり山

長虹 一井 越人 胡及 流彈 霜 虹 号 井 人 及

葉をとりて見ゆべき柳
火よりとらる枝のまもれそ月
あけられぬと人の心せはひらきよ
死す下もあふぬ山あり山
るれもあふぬ山あり山
霧より霧より霧より霧より
あけられぬと人の心せはひらきよ
二 長虹よりとらる枝のまもれそ月
木よりとらる枝のまもれそ月
色はる枝のまもれそ月
切花よりとらる枝のまもれそ月
きりし月の香きる月
人一代の香きる月
於世の香きる月

浮 翁 井 号 虹 号 及 孫 井 人 霜 虹

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

あつた海へ先あり。あつた。茶

かゝる庭を纏ふ。月
觸る。凡そ人をも引さうと
と〜とあけ〜と。名水の貝
春のまじり物の細きや粒あつたん
小袖も花にいろ。思ふ庭のなごり
淡義の情ははる〜の上へ人さし
〜つ〜〜心も花解り。残つて
思ふまじり物の木陰へ。豆敷。枕
〜まじり物の海へ。入

苔翠亭

月あつた海へ先あり。あつた。茶

越人

秋風

越人

菊

苔翠

友五

名菊

依

眺若

人

風

翠

依

風

人

菊

五

菊

わたりし縁葉垣の板
此方と名をいふ竹の家有る
中けに伝名ゆいるは智心
南よりあつる高きりなま
よもききそのまゝ心の子
おとくは花のかけのまひ
女房のくはるるまゝ
就年と物のくはるる友
縁葉と名をいふ竹の家有る
まゝのまゝの戸のまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
秋風やまをたぬまのま

菅翠
菊
友五
菊
此片
依
人
五
菊
翠
菊
人

管の底はあまき月
り月よりふらして一羽
仲より足る敷の敷
管人の底中より花の
破る牛より花のま

依
菊
菊
菊
菊

深川

酒きいふふは丁の月
着るる月と名をいふ
理をもとふ花より秋の
瓢箪の大きき石より

数人
菊
人

風より吹たて帰りの市人
何よりと長安へこれ名利の終
醫のおちや丁々のくはるはれ
いそいでと海色の穴をまわ
ひらき世はやく寺の法
は里より古ふ言著るを傳へ
足跡さるせぬ 雨のゆけあひ
きぬくやあまうかそくや
風ひよりのあまうは美し
まもつうす 昼の海傍をすくまぬ
物残るきた舟はあう
月とまはるの空をさよ

人 人 人 人 人 人 人 人

あまを 轉る くるの ね ね
破れ戸の新あけ付るまの末
尺毒いさひのきまの 枕 刻
匣あくる 帳 納りつゝ 十寸鏡
物さひの けり 糸子のもの
人さくいさひの 清きもの
初 漱き 花の 香は 花 隔
おき 嵐の 吹く 暑 中 に
垣 植の きけ 花の 香は 花
あやうくに 花の 娘の 姿
何の 香の 花 隔 花 香
ゆく 月よりの 花の 香は 花

人 人 人 人 人 人 人 人

枯もきく 船子 居候
秋の 回を 蒞きぬらるる 長引く
さゆし 文宇 可未
いの ち 瓦底の 木葉 居
残も する 子の 瘦し かの ち
花の 陰 淡 義 する あり ち ち
田 ち ち ち ち ち ち ち

大通庵 是 追善
手 かくら ち ち ち ち ち ち ち
子 ち ち ち ち ち ち ち
義 ち ち ち ち ち ち ち

風の ち ち ち ち ち ち ち
内洞の ち ち ち ち ち ち ち
油 ち ち ち ち ち ち ち
包 ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち
君 ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち
い ち ち ち ち ち ち ち
隙 ち ち ち ち ち ち ち
羨の 月 風 ち ち ち ち ち ち ち
地 ち ち ち ち ち ち ち
拾 ち ち ち ち ち ち ち

八

花をよそとらん梅は早
 秋はよそとらん酒の食干
 霜のよそとらん松のや
 火を焚きよそとらん秋
 生は付尺ぬき人のか
 去のさわさきよそとらん酒物
 蔓のよそとらん松の
 不二消おのよそとらん松

宗波
 友五
 霜
 水
 良
 通
 波
 五
 菊
 通
 菊
 五
 水

母の佛一 花は早
 花棚の白松の桶を
 濁りをさす砂川の
 花もすくはぬ月を
 破れ扇の骨を
 秋のよそとらん松の
 花もすくはぬ月を
 破れ扇の骨を
 秋のよそとらん松の
 花もすくはぬ月を
 破れ扇の骨を
 秋のよそとらん松の

水
 五
 菊
 通
 菊
 五
 水
 良
 水
 五
 菊
 通
 菊
 五
 水

八
 三

嵐子(由と吐あす) 手
秋山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
あまの(人) 山(山) 山(山) 山(山)
あまの(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)

菊 菊 水 五 通 良 菊 通 五 菊

を(毎) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)
山(山) 山(山) 山(山) 山(山)

出水
通 菊 友 曾 宗 嵐 雨 之 縁 通

カカラすくもくく一徳
故されくねくく牛の夕涼
汗をくく降く秋の稲妻
西の夕涼をあすく海の月
修の位くくむ碑の塔の香
若生を朽木の花くく極くく
まのまのくく母衣をくくん
館を北をくくわくくく秋の里
神火替竹くくそかくくし
作のまのくく冠とやきくくん
丸橋のくくくく石の塔
一かみのねくくくくくく

五 翁 水 波 洞 良 通 涼 竹 五 良 水

むくろくくくくを秋の夕涼
秋をくくくくくくくく法のかく
殿をくくくくくくくくけを
くくくくくくくくくくくく
松くくくくくくくくくくん
そくくくくくくくくくくく
生木を極くくくくくくく
かくくくくくくくくくく
竹四子人あえて若くく
若くくくくくくくくくく
竹くくくくくくくくくく
優婆塞くくくくくく

竹 菊 涼 通 良 水 竹 翁 通 涼 五 翁

麻の羽折千行心山次 菊

身おめ二尺の七五三を季の春
薩竹うらふ棋掃の侍
鶴うら懐のふ口おめをて
村の地取うおこす秋形
弘安湯の湧ゆる峰の月
葉をさき松林の方上横とふ
おれつ直ぬき船の里の菊賞う
とあふいさるお根の流ゆみ
之味縁を咲とすあつくと

菊 曾良 成水 嵐竹 宗波 浪通 友五 泥芹 若菊

はくくうり胸の欄のぬむしら
柔いころの情を思ふ流土と兼
橋あやめうに梅うら流
お月の板子うらう作の面
号とや侍の袍縁鬼よむあ
侍のあをうととや秋の蝶
及のうらうも音はたう
半筋のそあおむ花の坂
清のほくもあしきさうに空
性中いさめあうに舟とた
魂をいさく意のけあかさ
髪そ花いふあうおはす

菊 通 良 水 波 菊 通 玉 菊 竹 菊 波

あふさかりにあふさかり
男多に妹すすれをわさる
喉火梅子鼻跡をわさる
老ゆけハ針のさすのやける
子あふさかり傍にさすのきき
喉のあふさかり二ハさすをさる
ゆさみすさすの梅さすさす
甲斐作徳月をゆさる湯海
雲さすさるさるゆさる物能
五波良通水五箱通箱

あふさかり梅さすさるの梅能
箱良

あふさかり梅さすさるの梅能
箱

あふさかり梅さすさるの梅能
梅丸

あふさかり梅さすさるの梅能
箱
二人さすさるの梅能
箱

あふさかり梅さすさるの梅能
箱

志くく一く尺をきやみ徳の田植
管ゆくあめん不徳の玉月也
翁

花のけか多そみのむ改りや
翁

おてや掃んをゆき木
七文の八つを物のたひし
翁

林鐘十七日

何ふふしむ成氣時る月新降し
寸木

あお似くく三段の
翁

海志ゆき群くくもめをむく
翁

志ゆきぬりおとす
越人

花をゆけてらける山さく
秋葉

葉くくゆく標平のあ
秋葉

尺をきやれ花をもちきる将の細
悦盛

手葉をかたひきるんく
翁

管新考

能くや中をうらうらき
翁

はれく一尺ゆき
知足

扱くくくゆの弱をき方とて
安住

風そ懐きし月あり
秋頃の安あしき漢の地
和泉やうき子桐は
足 篇

ひさしと程あけし
黄菊うきしゆく新の月
篇

木うきしし宮をまきし
よむあはれしく雪の足
船のあし里の垣根を
篇
箱
篇

春の折あはれを
よむのあはれし人の影
みよとて舟の入りし
越人
羽豆
舟泉



